

# 最強の世話焼き山女、

## 山への愛を山に還す

寺沢玲子さん

誰もが耳にしたことのあるこの方、もしかしたら、誰もが知り合いか、謎の（？）女、寺沢玲子さん。いかに遊関係の由を、誰かが耳にしたこと、その名前、登山界の誰か、登山家、寺沢玲子さんと、その幅広い交友関係の由来、



(インタビューと文：張晶子)

### ◆ どんな子ども時代をすごしましたか？

一 青森県の天間林というところで、教員の両親と小学校4年生までを過ごしました。農家の同級生が、農繁期に学校を休んで農作業にかたり出されるような地方でしたが、自分としては、勉強しか出来ないことがコンプレックスでした。とにかく人見知りの強い子どもでした。

5年生になって、僻地の学校に両親がそれぞれ赴任して行ったので、弟と2人で祖母のいる野辺地町へ移りました。体育が嫌いで、スキーも苦手な子でしたが、土日に訪れる両親と別れる日曜の午後になると近くの烏帽子岳に登って、別れの間をやり過ごしているうちに山登りだけは好きになりました。体育は、グラウンドの周りをラッセルして参加したことにしてもらって、なんとか3をもらいました。

### ◆ 山への興味が具体的に変わったのは？

一 中学校でも人数合わせに入っただけで始めたテニスを  
高校でも続けようかと思いましたが、祖母となら  
な弟との暮らしで家事もやらなければならぬ理  
かっただけで、厳しい部活動は時間的にも無理  
だっただけで、程なくやめてしまいましたが。  
そし、少し出来たり、本屋の友人に「岳人」に  
り北海道と「山と溪谷」を早めに入手させ、教科書  
や「山だりし始めました。きっかけは「蜘蛛」に  
読んだハインリヒ・ラーの「白い蜘蛛」に  
あったかと思いたす。父が旧制中学時代に山登  
りを偶然ですが、薬師岳の愛知大学遭難事故で  
亡くなった学生の従兄弟だった高校の先生  
が「追悼集」を貸してくださったことも、山  
に傾倒した大きな理由になったと思います。

◆ 山登りの実践に飛び込んだのは？

一 独協大に進んでからです。当時はヨーロッパ  
パの登山を女意識して岳部に、ドイツ語を  
の登る女子前年の死亡事故のため、活動自  
中、たまたま覗いたワングルに女子がいて、  
「山岳部はタテシカ登らないが、ワングルは  
タテにもヨコにも、人の行かないところにも  
行く」と勧誘され、入りました。 (女性だと思っ  
た) )  
の「果てしなき山行」に憧れて、藪こぎだ  
けの沢登りに没頭しました。ゼミで選んだ  
中世ドイツ語の教授も山の好きな方でした。  
4年生のあつた時、足に痺れを感じ、背骨が  
遅れていて療養のため留年し、就職は1年  
遅れて個人司法書士事務所に入り、  
そし、一人利根川源流を藪こぎして、  
時出合った。一方、大学のワングルの仲間  
や、アウトドアのクラブをまとめ、

ヒマラヤに送り出したたりするイベントに係わったりもしていました。

◆ インドとの関わりが深まったのは？

一 クライマーからハイカーまで集う「同人メビウス」に参加したり、恩師の紹介で、加藤保男さんが亡くなった後の加藤さんの会社でアルバイトをしたり、していましたが、84年に笠松美和子さん（93年宝剣岳没）と長尾（現：山野井）妙子さんと知り合いになった頃、外反母趾の手術をすることになり、以後、沢登りは冷えると足指が動かなくなってしまうので出来なくなっていました。笠松さんが毎日見舞いに来てくれたことを覚えています。

日本ヒマラヤ協会（H A J）の方に、ある沢のルート図を送ったのがこの頃で、86年にインドと合同の女子隊への隊長としての参加のお話をもらったのです。キンナウルカイラスという6400mくらいの山は登れませんでした。ヒマラヤって面白い！と、いつかまた登りたいと思いました。

87年には北海道女子隊のヌン峰遠征に通訳として参加し、下山後、前年にお世話になったマナリにある登山学校に1ヶ月ほど居候したのです。この時出来た友人が今も繋がっています。この頃にはH A Jの事務所でいろいろお手伝いしていました。結局インドやパキスタンには、遭難事故処理や遺体収容に5度回行っていきますが、インドの友人にはその都度助けられています。

90年のH A T - Jのスタート時には、H A Jからのお手伝いということで参画し、会員になり、現在に至っています。最初の「テイクイン・テイクアウト」の冊子作りもお手伝いしました。

◆ 現状の山をめぐる環境について思うことはあ

りますか？

— インドについて言えば、昔はトイレ紙を使わず水を使う習慣だったのが、今、トイレトペーパーを使う登山者が増え、ゴミが増えしましました。一方、若い人は環境保護にも関心はあり、ゴミ問題に取り組もうという人たちもいます。ただ、インドの登山隊の多くは軍隊に由来のもので、大部隊で、使い終わったバッテリーを捨てたり、食料の残りを捨てたり、まだ環境意識は高いとは言えませんが。学校でも、インドの私の友人の一人は、盲人学校の子どもたちを自然の中に連れ出して岩登りさせたり、ボランテイア活動をしていて、あるところなのではないうか。

◆ 大学の山先輩である笠松美和子さんのお墓参りで、沢さん、HAT-Jの寺全山女面の愛。はとうの笠さん、由見の大きさをい